

# 私 の 工 夫

子どもに合わせた授業を通して、内的な学びに気付く

県立倉敷まきび支援学校

教諭 高木 凌



## 1 はじめに

私は知的障害のある児童の授業づくりにおいて、一人一人の実態を的確に捉えることが最も重要だと考えている。しかし、同学年であつても一人一人の発達段階や行動の特徴、理解の仕方は大きく異なるため、簡単には捉えられない。特に、発語や表出が少ない児童の内的な気付きや考えを知ることとは難しい。そのため、児童の教科に関する実態だけではなく、生活全般の様子を知り、子どものことを広く捉えることが大切であると考える。内的な部分を把握するためには、平素の様子から行動

の裏付けとなる根拠を明確にしていくことが欠かせない。また、同僚や保護者と密な情報交換を行い、より多角的な視点で児童のことを知ることも行動の裏付けを確かなものにするためには大切だと考える。このようにして、児童の実態を捉え、授業内で見せる言動と照らし合わせることで、児童の内的な変化に気付き、子どもがどう感じ、どう考えたのかを自分なりに語ることができるようになってきた。ここでは、私が昨年度から担任している4年生に対して行った国語科「劇をしよう」の授業を挙げて、子どもに合わせて授業づくりをする過程や児童の内的な変化

に関する評価の工夫点を説明していく。

## 2 私の実践

### ① 子どもに合わせた授業づくり

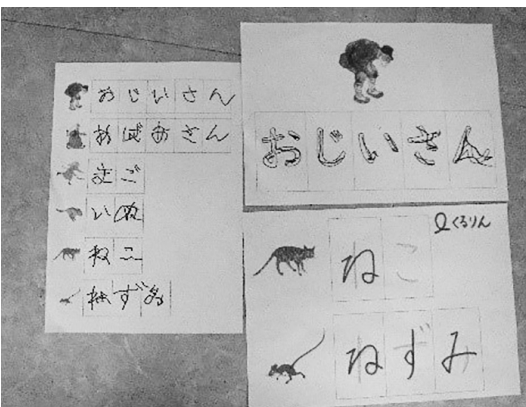
私は、昨年度から毎日絵本の読み聞かせをしている。初めは絵本に興味を示さなかったが、繰り返し読むうちに、目線が絵本へ向くようになり、自ら好きな本を選んだり休み時間に読んだりする姿が



注目して読み聞かせを聴く姿

見られるようになった。その中でも特に児童が気に入っていた「おきなかぶ」と「もりのおふろ」の絵本を使って劇の授業に取り組むことにした。

今回の劇では、話の大きな内容が分かり、言葉や動作などで児童が自ら表現できることを大切にしたい。話の内容をつかむときには、一人一人の読み書きの習熟度に合わせて課題を用意し、繰り返し登場人物の名前を確認したり、登場人物カードを作成し、児童が操作しながら話の順番に並べたりする



書く量や文字の大きさを子どもに合わせる

活動を行った。劇をするときには、自らやりたくなるような仕掛けを大切にしたい。変身セットや本物に見立てた小道具を準備して興味関心を喚起することはもちろん、なりたい役を自分で選んだり、友達同士で次の出番の役を呼び合ったりするなど、教師の介入が少なくなる環境設定を意識して設けることで、子どもの主体的な姿を引き出すことができた。毎時間児童の様子を見ながら即時改善していくことで、徐々に子どもに合った授業になっていった。

## ② 内的な変化の見取り

私は、授業の前にはできるだけ具体的にゴールとなる児童の姿をイメージするように心掛けていた。本題材では、「自分が演じる役の出番に気付いて、自ら前に出ようとする姿」と「絵本の流れに沿って、言葉や動きで表現しようとする姿」を、一人一人の児童に

照らしてイメージし、授業の評価と改善を行ってきた。ここで難しかったのが、先に挙げた内的な部分の見取りである。これを見取るために平素の姿と授業内での姿を比較し、価値付けを行った。「おおきなかぶ」でのA児を例に出すと、平素は名前を呼ばれても応じるまでに時間がかかることが多いが、「ねずみさん」という呼び掛けを受けてすぐに立ち上がり、演場にやってきた。また、普段は慣れない物を身に付けることが苦手だが、授業内ではねずみの被り物がずれる度に自分で被り直していた。更に、A児は手にしたものをすぐに引く張ることが多いが、劇のときは掛け声が掛かるまで縄を持って待っていた。これらの姿を私は、「自分の役を理解し、出番に気付いている」、「みんなと一緒に引っ張りたい気持ちがある」と、A児の内的な部分の評価をした。このように、平素の児童の様子を

よく知ること、授業内の姿だけでは分からない根拠に基づいて内的な部分の評価をすることができた。



ねずみの出番まで待ち、かぶり直す姿

## 3 おわりに

本題材を通じて、授業づくりはその授業だけではなく、日々の児童の姿をよく観察し、その実態を的確に押さえることが重要だと実感した。子どもたちが自身の成長を感じ、うまくいったと喜ぶ姿を

見ることは何よりも嬉しい。内的な部分の見取りは必ずしも子どもの思いと合致しているとは言いが、子どもと関わり、子どもを知ろうとし、子どもに合わせて授業づくりをしていくことで、その整合性は高まっていくものだと考えている。そうして、子どもの成長により多く気付き、共に認め合える教師であり続けたいと思う。



絵本のページを確認して動作化する姿